

はなみずき

(病院だより)

2014年5月

発行

山梨大学
医学部附属病院

病院の理念

一人ひとりが満足できる病院

病院の理念の主旨

私たちは、本院の使命を達成するため、医療を受ける人、医療に携わる人など、本院を利用する方一人ひとりが満足できる病院をつくります。

病院の目標

- ・共に考える医療
- ・質の高い安全な医療
- ・快適な医療環境
- ・効率の良い医療
- ・良い医療人の育成

財務担当副病院長として

副病院長(財務管理・経営改善・地域医療担当) 佐藤 弥



副病院長となる以前より、医療情報部長や病院経営管理部長(現在も)として、病院長を支援し、病院運営に関わってまいりました。現在は副病院長として、病院全体に関わる予算や計画等の企画や実行に、病院経営企画室とともに毎日悪戦苦闘しています。一応医師ですが診療はせず、電子カルテの導入を契機に、病院内のほとんどの診療科や部門に中立の立場で関わりを持っています。現在は、病院再整備や経営改善のための計画の立案が中心です。

院内には多くの診療科や部門があり、それぞれがより良い診療活動等を安全かつ効率に行うことを目指していることを理解しています。しかし、どの病院組織でも同じですが、病院は診療科の診療のみで収益を上げることはできません。看護部や中央診療部門、事務部門の協力や業務により、全体として診療報酬を得ています。また、山梨大学医学部附属病院は山梨県の医療の「最後の砦」として、地域医療を維持発展させる使命・義務があります。本院は、各部門の発展だけでなく、病院全体としてこの使命に応え、義務を果たす必要

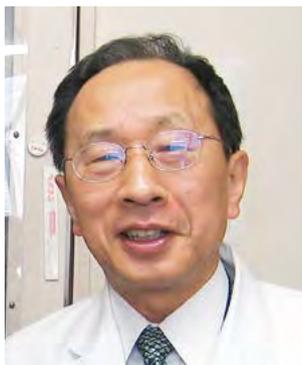
があると考えています。所属部門の活動だけでなく、全体として最も有用性や効果の高い診療活動を行うため、相互に立場を理解しあって、限られた予算やスペースを有効に活用していただきたいと願っています。

山梨県の医療の中心を担っているため、県内の医療に対して、多少の困難はあっても支援をする必要があると考えています。本院は、職員の皆さんを含めた一般県民の方をはじめ、山梨県などの自治体、病院や診療所からの要望や意見を、大学病院としていただいています。このようなことから、山梨県地域医療計画や山梨県医師会、患者満足度調査、がんピアサポートなど、積極的に院外と関係した活動も行っています。

山梨県の医療の中核としての「プライド」と使命感を、全ての職員に意識していただきたいと願っています。私自身は現在の立場で、本院及び山梨県の医療の発展に、微力ながら協力できればと思っています。多くのご不満があるかと思いますが、病院長をはじめとした執行部による運営に、ぜひ理解と協力をお願いする次第です。

お世話になりました（退任あいさつ）

糖尿病・内分泌内科、腎臓内科 前科長 小林 哲郎



私は本年3月31日をもって山梨大学医学部附属病院の糖尿病・内分泌内科、腎臓内科長を退任いたしました。平成13年から約13年間の在任期間、お世話になりました。

本院の糖尿病・内分泌内科、腎臓内科は、

糖尿病、糖尿病性腎症、腎炎、甲状腺疾患などのホルモン異常さらには膠原病などの広い分野の診療にあたっています。在任中はこの広い診療分野の臨床力を高めることに力を入れました。着任当時の山梨県の糖尿病の診療体制は、糖尿病専門医が不足しているだけでなく、支えてくれるコメディカルスタッフも極めて少ない状態でした。さらにCSII（インスリンポンプ）療法をはじめとする専門的な治療の普及も充分ではない状態で、病診連携も充分ではありませんでした。會田現副科長と共に山梨県の糖尿病療養指導士（CDE）の育成とCSII療法の普及、患者会の充実に力を入れてきました。その結果、多数のCDEを

育成することができ、県内の先進的な糖尿病のセンターになり得たと思っております。また、看護部、栄養管理部及び薬剤部のスタッフの方々の献身的なご協力があったことも心より感謝したいと思います。腎・膠原病の診療分野でも糖尿病性腎症、血管炎の診断治療に対する診療体制が充実してきています。若手がそれぞれの分野で育ち、また国内留学などから戻って、ますます機動性が増し、診療サービスが向上するものと期待しています。

附属病院のますますの発展を祈念するとともに、在任中私を支えて下さったすべての方々に対しお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

皆様のますますのご活躍を期待しております（退任あいさつ）

基礎・臨床看護学講座 前教授 中村 美知子



平成7年4月山梨医科大学に看護学科が新設され、翌年4月に臨床看護学講座教授として着任してから18年間、大変お世話になりました。附属病院教職員の皆様、特に看護部の皆様には看護学生の臨床実習指導等でお世

話になり、心から感謝しております。看護学生の専門科目の臨床実習は3年次後期から4年次前期まで約1年間の長丁場でしたが、18年間大過なく楽しく実習ができましたのも、ひとえに教職員の皆様の温かいご指導・ご協力の賜物と感じております。

わが国の有職女性の10人に1人は看護職で

あるといわれる昨今、看護職者の質が問われています。本学大学院には修士（看護学）、博士（看護学）が取得できるコースがあり、夜学の道も開かれています。一人でも多くの看護職の皆様が大学院（修士課程・博士課程）で学び、本院の看護の質はもちろん、山梨県ならびに日本の看護の質を高められることを願っています。有能な教職員の皆様の力を結集し、さらにすばらしい病院に発展されることを心から期待しております。

退任あいさつ

検査部 前臨床検査技師長 小池 亨



平成26年3月31日をもって定年退職いたしました。昭和58年4月に信州大学より転任し、山梨医科大学検査部の創設期に携わりました。いつの間にか30年が過ぎ、その間公私にわたり多くの皆様にお世話になり、深く感謝申し上げます。

謝申し上げます。

診察前検査が当たり前の現在、僅かな機器トラブルが発生すると、結果報告が遅れ各診療科にご迷惑をおかけし、対応が遅いとお叱りを受けることもあります。当たり前のことを着実にこなす日常業務の積み重ねの大変さを実感しました。

そんな中、就任時に掲げた目標の一つの、臨

床検査室の品質と能力に関する国際規格であるISO15189の取得を、平成25年6月に達成できたことは、臨床検査技師長在職時の望外の喜びと言えます。この件は、島田病院長をはじめ、事務部門及び関連する多くの方々の温かいご理解・ご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。ISOに限らず、技師長在職中の3年間に得た他部署の方々とのめぐりあいが、私の財産です。

この認定を今後維持していくためには、検査部全職員が一丸となって日常業務に取り組むことが不可欠であります。後任の両宮憲彦技師長が、抱負を述べておりますので、引き続きのご支援をお願いしたいと思います。

本院を退職するにあたり、職員の皆様のご健康・ご活躍と、新病棟建設を契機とした山梨大学医学部附属病院の益々のご発展を祈念しております。

長い間、有り難うございました。

事務部長としての4年8か月を振り返って

役員支援室 特命事項担当（前医学部事務部長） 白沢 一男



私が医学部事務部長を拝命したのは、平成21年8月1日です。以後、4年8か月が経過し、この度、何とか無事に定年を迎えることができました。

当初、事務部長としての抱負で、島田病院長を支え、教職員の皆様とさまざまな問題に立ち向かい、解決を目指す方向で努力したいと述べた記憶がありますが、なかなか実現は思うようにはいきませんでした。

この4年8か月の間に病院で起こった事柄は多岐にわたりますが、最初に取り組んだ事業は、ヴァンフォーレ甲府へのグラウンド貸与です。当時、賛否両論があった中で、教授会で受入が決定した直後に私が医学部事務部長に就任しました。ところが、確かに決定はしたのですが、文部科学省への説明がなされていなかったため、私はその必要性について財務管理部と共に文部科学省に出向き、直接説明をしました。その結果、文部科学省からは、「学生への教育的配慮をして

もらえば、むしろ積極的に推進することで、大学の新たな広告材料としていい機会になるのでは」という前向きな意見をいただきました。これにより、この事業は一気に進むことになりました。

次に関わったのが、病院機能評価(ver.6)ですが、皆さんの努力により一発取得となり、改めて病院長を中心とした本院のチーム力を実感させられました。以後、病院再整備に向けた文部科学省との協議、マッチング16人問題、計画停電、被災地医療支援、県内病院統合問題、相次ぐ不祥事、医療スタッフの処遇改善、放射線治療棟オープン、新病棟起工式、30周年記念事業など数々の場面で、少しでも皆さんのお役に立てればとの思いで病院長の後を追いかけてきて、何とかここまでやって来ることができました。病院は常にいろいろなことが起こりますが、この緊張感が私は好きです。

私はここで事務部長としては区切りとなりますが、今後も大学に残り、大学及び病院の発展に微力ながら関わらせていただくことになりました。これまでの皆様方のご支援とご協力に心から感謝するとともに、引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。

就任あいさつ

放射線治療科、放射線診断科 科長 大西 洋



平成26年1月1日に、内山暁初代教授、荒木力先代教授の後を受け、放射線科長を拝命いたしました。小田原市生まれ横浜市育ちで東京（世田谷）に通学の後、昭和58年千葉大卒です。山梨（医科）大学には昭和59年に

研修医として赴任し、千葉大放射線科OBの初代内山教授と当時助教授でいらっしゃった荒木力教授に手厚いご指導をいただきました。平成4年から成田赤十字病院に在籍した後、平成7年に荒木力教授就任時にお声がけをいただき山梨（医科）大学に戻りました。

放射線医学は画像診断・核医学・放射線治療・Interventional radiology (IVR) と多岐に渡っておりますが、私の専門は放射線腫瘍学（悪性腫瘍の放射線治療・画像診断・IVR）であります。放射線治療は近年の機械工学の発展

により、定位放射線治療・強度変調放射線治療・画像誘導小線源放射線治療・粒子線治療などさまざまな発展を遂げており、より腫瘍のみに放射線を集中させることが可能になっております。幸い、本院と関連施設にはこれらの最先端装置がほぼ全て導入されており、世界一の放射線治療を提供できるものと自負しております。画像診断やIVR分野についても、荒木力先代教授の後を継ぐ優秀なスタッフにより高レベルの診療と国際的な研究活動を展開しております。

これから未曾有の高齢化社会を迎える日本にあり、放射線医学の発展は体に優しい診断と治療を行う上で大きく貢献できるものと信じております。また、放射線科は全ての診療科に関連いたしますので、院内の皆様方からも温かいご支援ご指導をいただけますようよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

検査部 臨床検査技師長 雨宮 憲彦



この度、平成26年4月1日付で検査部臨床検査技師長を拝命し、小池前技師長から引継ぎ4代目の職務を担うことになりました。

私は昭和58年4月から山梨医科大学検査部の創設に諸先輩とともに携わり、今年で32

年目となりました。この間検査技術や高性能分析装置および画像解析装置は目覚ましい進歩を遂げ、本院検査部も、診察前の迅速検査の改革及び検査項目の拡充、遺伝子検査の導入、種々の画像検査ニーズに対応した超音波診断装置の充実、時間外緊急検査・輸血検査の拡充などを行い、診療支援に貢献してきました。また、「ISO15189」（臨床検査室における品質と能力に関する国際規格）取得によって検査部職員の意識改革やNST、ICT、クリニ

カルパスなどのチーム医療への参画も推進してきました。

今後の抱負として、平成27年度からの中央診療棟を含む病院再整備計画に基づき、検査部もワンフロア化に則した迅速検査室及び生理検査室の拡充、輸血部との連携、病棟・採血室からの迅速な検体搬送構築、検査相談室の創設、人材育成の一環である専門性を高める認定資格の取得、更なるチーム医療への参画などを目標に掲げ、検査部の理念である「信頼性の高い臨床検査の提供と医療貢献」を更に飛躍できるよう各部署との連携を深めながら診療支援に臨む所存です。今後とも皆様のご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

医学部事務部長 山田 徹



4月1日付けで白沢前事務部長の後任として事務部長を拝命しました山田です。医学部の使命である教育、研究、診療をサポートする事務部にあって、武田医学部長、島田病院長の側面から補佐するという重責に、緊張感

に包まれた毎日を送っています。

私は、附属病院の開院の年である昭和58年に旧山梨医科大学に転任して以来、統合まで約20年勤務し、新生山梨大学の国際研究協力課、病院経営企画室長の後、研究支援課長を経て本職となり、医学部は2年9か月ぶりの勤務となります。この間、病院経営企画室の前身である病院運営改善推進室や現社会連携・研究支援機構の最初の組織である国際研究協力課の創設、医事業務の外部委託、電子カルテシステムの原点であるオーダリングシステムの導入といった現在に繋がる節目の仕事に幸いにも携わることができました。その折々に共に苦勞し、ご指導いただいた先生方、看護師、コメディカル、事務部等の皆さんから、励ましの声をかけていただき、元気をいただいていることに日々感謝しています。

現在、本院では、新病棟の建設が進み、立体駐車場がオープンするなど再整備事業の真っ盛りです。病院経営企画室時代に再整備計画資料を作成し、文科省に日参していた頃には、この具体的な光景まではなかなか思い至らなかったのですが、日々のダイナミックな工事の進捗を目の当たりにして、再び再整備に関われることを喜びに感じています。

医学部は、よき医療人の育成が最大の目的であり、さらに高度な研究とその成果の世界への発信、そして診療を通じて年間延べ40万人を超える患者さんへの高次医療の提供を行う社会貢献がその責務とされています。また、国立大学を取巻く環境の変化は、本学も例外ではなく、再定義されたミッションの実現に向けて、前田学長のリーダーシップのもと大学院、人事制度をはじめとする新たな大学改革が進行しています。

医学部事務部は、実務とマネジメントを通じて、医学部の下支えを担う重要な部門であり、限られた人員と予算の中で、組織的に効率的なサービスの提供が求められています。この改革への対応を含め諸課題の解決に向けて、微力ですが精一杯取り組んでいきたいと考えています。医学部、附属病院各位のご協力とご指導をお願いします。

診療報酬改定について

医事課 医事会計グループリーダー 保坂 直史

平成26年度の診療報酬改定は、改定率は実質+0.10%（本体+0.73%（+0.63%は消費税増税補填分））と、若干ではありますがプラス改定となっています。

今回は「入院医療・外来医療を含めた医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等」に取り組み、医療提供体制の再構築、地域包括ケアシステムの構築を図る。」という基本認識のもと、重点課題として「医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等」が挙げられています。例として、本院の入院基本料である7対1入院基本料の要件（重症度、医療・看護必要度や平均在院日数、自宅等退院患者割合など）が厳格化されており、これによっ

て現在全国で約36万床ある7対1入院基本料病床を平成37年までに高度急性期病床として18万床に減らし、病床機能分化を推進しようとする方向性が強く感じられます。

今回の改定を機に、病院理念である「一人ひとりが満足できる病院」を再認識し、地域社会、患者さん、病院職員がそれぞれ満足できるよう更なるご協力をお願いいたします。

なお、診療報酬改定等に関する疑問・質問等ありましたら医事課までお問い合わせください。

病院立体駐車場オープン

総務課補佐 矢澤 泉

去る4月14日、待望の病院立体駐車場が完成し供用開始となりました。同駐車場は、鉄骨造3層4段の構造で延べ面積10,475㎡を有し、平面分と合わせ654台分の駐車スペースを備えており、このうち56台分は車いす等優先駐車スペースとしています。これにより、恒常的な駐車場不足が解消され、雨や雪の日でも屋根の下で乗り降りが可能となるなど、外来患者さんをはじめとする来院者の利便性が大幅に向上することとなりました。

また、同駐車場内1階部分には、災害時に臨時診療場所兼避難所として活用可能な照明、電気及び水道設備を完備したスペースを設けています。あわせて、同スペースで使用するエアテント等の災害対策医療用品等も県からの補助により整備しており、基幹災害支援病院としての機能の充実を図っています。

この病院立体駐車場オープンに先駆け、完成式典・内覧会が4月10日に行われました。前田学長、島田病院長の挨拶のあと、上野施設・環境部長からの工事経過報告、島田病院長らによるテープカット、初乗り入れが行われ、続いて出席者全員が場内を見学しました。



完成式典で挨拶する前田学長（左）と島田病院長



テープカットの様子。左から岩下副院長、藤井副院長、佐藤理事、前田学長、島田病院長、武田医学部長、久木山副院長、佐藤副院長

施設基準等に係る適時調査について

医事課 医事会計グループリーダー 保坂 直史

昨年12月12日、施設基準等に係る適時調査が実施され、8名の関東信越厚生局山梨事務所検査官により、「施設基準が適正な届出がなされているか調査・確認を行うとともに、施設基準の内容についての周知徹底及び適正な届出を図ること」を目的に、届出施設基準ごとに書類検査及び実地検査が行われました。

調査終了後の講評及び結果通知では、主に入院基本料に係る指摘・指導事項がありました。また、調査当日の口頭指導等でも、いくつかの

指摘事項があり、各部門と事務との連携に不備があったために指摘されたものもありました。

今後は、各部門と事務が連携を密にして、適正な届出・報告を行い改善を図りたいと思います。



院内調査風景

記録的豪雪の災害対策本部から

医学部長（災害対策本部長） 武田 正之

本年2月8～9日と14～15日に、関東甲信地区に記録的な降雪がありました。特に2月14日夜から15日未明にかけては甲府地方では過去120年間の最高記録となる100cm以上の積雪量であったため、主要な道路は雪で通行不可能で、JRも完全に運休し、山梨県全体が陸の孤島状態となりました。医学部及び附属病院も周辺の道路や構内の駐車場が雪に覆われた状態となり、病院周辺の道路はもとより、病院敷地内の除雪もほとんどすべて人力で行わざるを得ず、病院機能が停止しかねない状況となりました。

病院長、救急部長、事務部長をはじめ、相当数の医学部職員が県外から山梨に戻れない状況であり、こうした中で医学部長・藤井副病院長が中心となって17日（月）午前9時半によく緊急災害対策会議を招集し、情報を把握するとともに今後の対策を検討しました。周辺道路・駐車場の状況などをテレビ・ラジオ等で報道してもらい、医学部の講義・実習は中止としましたが、最大の問題は赤十字血液センターからの迅速な輸送が困難である輸血用血液、入院患者さん用の食糧の備蓄でした。前者は輸血が必要となる可能性のある予定手術の延期で対応し、後

者は20日以降の食糧確保が困難な状況でしたが、18日に中央自動車道が開通したために最悪の事態には至りませんでした。

今回は、医学部、附属病院及び職員の自宅での停電やガスの供給停止という状況ではありませんでしたが、大規模地震や噴火の際には今回のようにはいきません。医学部・附属病院の災害時の問題点が明らかとなったことから、これを教訓として、現在、新たな体制構築の検討を行っているところです。

最後に、除雪に参加していただいた近隣の教職員の皆様、学生の皆様、そして山梨県の要請により北富士駐屯地から駆け付けてくださった陸上自衛隊第1特科隊の皆様には、心から感謝申し上げます。



降雪から一夜明けた2月15日の風景

病院再整備関係報告

病院経営企画室 再整備企画グループリーダー 佐藤 康樹

病院再整備に関しましては皆様より多大なご協力を賜り、誠に感謝申し上げます。

新病棟の建設工事は2月の大雪の影響により、基本工程から2週間程度の遅れが生じましたが、工事現場の方々のご努力もあり、現時点ではほぼ遅れを取り戻し、基本工程どおりに進捗しております。5月現在は3階部分の床面を作成する作業に入っています。工事現場を覆う囲いからは新病棟の姿はまだ大きく見えてはいませんが、3階の床部分が仕上がれば、いよいよ囲いを飛び出して姿が見えてくるものと思われます。このまま順調に作業が進めば、8月頃には7階部分までが仕上がり、新病棟の大きさそのものが皆様にも確認いただける状況となる見込みです。

このように作業を進めているところでありますが、新病棟が立ち上がってくるのに従い、隣接する建物、特に東病棟や放射線治療棟・MRI-CT装置棟には工事音等の影響も大きくなって来るも

のと思われます。極力、騒音や振動が発生しないように取り組みますが、診療への影響が大きい場合には病院経営企画室担当までご連絡をお願いいたします。また、新病棟の建設内容確認のため、院内スタッフの皆様にはお時間をいただくことが今後も多くあるかと存じますが、より良い病院とするため、引き続きご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



新病棟建設工事の状況（5月2日現在）

DMAT 研修参加報告

心臓血管外科、呼吸器外科、小児外科 助教 加賀 重亜喜

平成26年1月15日から18日までの4日間、兵庫県で開催された日本 DMAT 隊員養成研修に参加してきました。本院では、これまでに3隊計15人が研修し、DMAT 隊員として登録されています。今回は、県立中央病院から加藤頼子医師、玉川勝也診療放射線技師、遠藤愛樹薬剤師、本院からは落合夕香里(7階西病棟)看護師との5名で、初めて2病院の混成チームでの参加となりました。

研修期間中の1月17日は、研修場所である兵庫県災害医療センターの設立や日本 DMAT が組織化されるきっかけとなった阪神淡路大震災から数えて丁度20年目を迎えた日にあたり、本研修の目的である専門的な災害医療チームの必要性を一層強く実感しました。

研修内容は、センター内での座学から、雪が舞う六甲山近くで行われたシミュレーション実習までとかなりハードでしたが、学生ボランティアを含め、総勢100人を超す DMAT インストラクターの方々の情熱的な指導に感動を覚えました。

災害現場は、個々ではなく、集団としてのチーム医療が、通常診療以上に大切であることを研修の中で繰り返し学びました。今回の混成チームは、研修前日夕方に現地で合流しましたが、訓練中は抜群のチーム力を発揮できたと満足しております。

災害医療には、もう一つ重要な点として、DMAT チームを送り出す病院の体制、協力が必要不可欠です。研修期間中、病院を離れた私たちをサポートしていただいた関係スタッフの方々に心から感謝するとともに、本院はその体制が整っていると感じました。今回習得した知識や技術を、今後起こりうる災害の場で発揮できるように、日々準備をしていきたいと考えています。



研修に参加した加賀助教(中央)、落合看護師(左から2番目)と県立中央病院の皆さん

追悼の辞

心臓血管外科、呼吸器外科、小児外科 准教授 鈴木 章司

第2外科教授の故・松本雅彦先生は、強靱な体力、精神力をもって5回の大手術を乗り越えられ、2年間に及ぶ闘病生活を送られてきました。しかし、平成26年2月27日午前2時44分、満62歳をもって旅立たれました。

生前の松本先生は、卓越した技術、明晰な頭脳、そして大らかな人間性をもって患者さんや医療スタッフに接し、外科医の模範を示さ

れました。そして、誰からも信頼され、敬愛されてきました。優しく、時には厳しく御指導を受けた私たち医局員は、先生のあまりに早い御逝去に接し、無念の涙を禁じ得ません。ここに医局員を代表して深甚なる感謝の意をお伝えするとともに、これから各自が先生のお教えを継承、発展させていくことをお誓い申し上げます。御冥福を心よりお祈りいたします。



第17回世界心臓胸部外科学会
会頭挨拶(平成19年京都)



医局員に対する手術指導



インドへの学会出張にて
医局員と地酒で乾杯



御親友の中井氏と



米国胸部外科学会参加後、
ナイアガラ瀑布にて鈴木准教授と